

『教会の社会教説綱要』（教皇庁正義と平和評議会、マイケル・シーゲル訳、1100九年）を読んで

瀬 本 正 之

『教会の社会教説綱要』英語版（Pontifical Council for Justice and Peace, COMPENDIUM OF THE SOCIAL DOCTRINE OF THE CHURCH, Libreria Editrice Vaticana, Reprint April 2005）の頁を開いたのは1100五年の若葉芽吹く頃であった。入手したのは同年四月のリプリントではあったものの、公表されたのはほんの半年前、1100四年一〇月二十五日である。その日から『綱要』は私の座右の書となつた。

1100六年四月三〇日付『教皇庁社会科学アカデミー（The Pontifical Academy of Social Sciences）EXTRA SERIES 八号』によれば、公表後わずか一年半で、すでに、英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、ポーランド語、クロアチア語、セルビア語、アルバニア語、あるいは、韓国語、中国語に訳されている。世界中、特に、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカで歓迎されたようだ。世界各地で多種多様な観点から『綱要』の発表・研究がなされる中、殊に、キューバでは共産主義政権下の教会のさらなる活性化を、ロシアでは正教会との交流のさらなる深化を

もたらす機縁となり得る」と示唆されている。まさに「対話の書」である。

本書は、その名の通り「綱要」とは言うものの、先述の英語版でも、本文三〇〇頁強、索引部約二〇〇頁、計五〇〇頁を上回る大部である。邦訳なら、さらに嵩張ることとは覚悟しなければなるまい。事項索引は実に豊富である。引照文書索引は、聖書は勿論、第二バチカン公会議に至る諸公会議の教令、カトリック社会教説には欠かせない現代諸教皇（レオ一二世～ヨハネ・パウロ二世）の文書、『カトリック教会のカテキズム』や『カトリック新教会法典』、教皇庁諸機関や教会著述家たちの文書、そして、『国連憲章』等、国際法の条文、と網羅的である。本『綱要』は、単に「カトリック教会の社会的な教え」の羅列ではなく、「公共的議論に開かれ組織的研究に耐え得る神学的反省 reflectio theologica の総合的提示」として企図された。教会の内外を問わず、政治的な右か左かに終始する言語使用に封じ込められ勝ちの現代人にとって、最良の「神学的著作」の一つであろう。

二五年を越す在位期間中に三つの社会回勅—『働く人のための社会』(一九八九年)、『新しい課題 Centesimus Annus』(一九九一年)、『Sollicitudo Rei Socialis』(一九八七年)『真の開発とは』(一九八一年)『眞の開発とは』(一九八一年)『眞の開発とは』(一九九一年) —をものした前教皇ヨハネ・パウロ二世が、アメリカの司教たちからの提言を取り上げ、教皇庁正義と平和評議会に託したところから『綱要』作成は、完成まで五年の歳月を要した。本書の如き性格から見て、教会史上初めての類のテキスト編集作業だったのかも知れない。すべての人格とあらゆる社会の社会的善を促進すべく、激しく急速に変化する社会的現実の只中で「時のしるし」を見定め、福音に根差した社会的応答を可能にする普遍的原理を明らかにし、現時点での主要な社会問題への福音的指針を示す、という課題は生易いものではない。本書公表に際して教皇庁正義と平和評議会会長マルティーノ枢機卿が述べた一言「識別から生まれ、識別そのものであり、識別を目標とする教え」は至当である。

各論部分(第二部)で「家庭」から「労働」「経済」「政治」「国際関係」「環境保全」を経て「平和」へと説き及ぶ『綱要』の包括的な問題意識と系統的な探求姿勢は、原論部分(第一部)で展開される原理的考察によつて支えられている。「神の似姿 *imago Dei*」として創られたからこそ打ち立てられ得る「人間の(超越的な起源かつ目的を有する)尊厳」そのものが一挙に要求する五つの社会的な「原理」(共通善 *common good* / 物財の普遍的用途性 *universal destination of goods* / 補完性 *subsidiarity* / 参与 *participation* / 連帯 *solidarity*) ～、それらと不可分に結ばれた二つの社会的な「基本価

値」(真理/自由/正義)が説き起^こされる。私たち人間が、自らと共に、最上の意味で人間たるに値するものとなし得る超越根拠、原理、基本価値、そのすべてが、イエス・キリストが、その「十字架の死」に至るまで、地に落ちて実を結ぶ一粒の麦となつて現実に歩んで見せた「愛の道」によつて、確かな希望を帶びた「いのちの招き」として迫つてくる。

『綱要』は、序文の中で、自らが抛つて立つこのような人間肯定の思想を、その「真正性 authenticity」の確信をもつめ、「連帶的な全一的ヒューマニズム an integral and solidarity humanism」と表現した。その中身は、伝統ある「神学的人間論 theological anthropology」を、「人間に對する神の愛の計画」への信頼から湧き出る勇気をもつて、現代の問題状況に晒し続ける対話の中では、産みの苦しみを伴いながら徐々に形成されるであろう手堅い「キリスト教人間学 Christian anthropology」を土台とする現代の「キリスト教ヒューマニズム Christian humanism」そのものである。